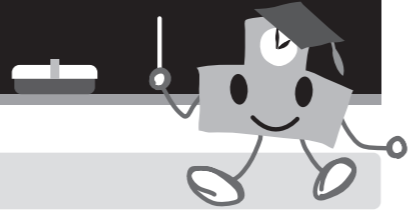


小学校の事例 豊平区 福住小学校

廃油を利用したキャンドルづくり。「体験」からリサイクルを「実感」。

地域との交流を望む大学生とニーズがマッチ。廃油という身近な素材でキャンドルづくりする体験から学ぶ、環境問題。ごみができるものになるリサイクルを実感する事例。



はじめに 体験 触れることが大切

本校では、総合的な学習の時間の柱の一つとして、環境にかかわる学習を4年生と5年生で実施している。4年生では、地域にあるウラウチナイ川を観察し、自然への興味・関心を高める学習を継続してきた。また、5年生では、環境問題を追求する学習として、今年度、廃油を利用したキャンドルづくりに取り組んだ。

これらの学習は、実際に触れたり観察したりする体験的活動を重視している。体験をとおして感性や問題意識が揺さぶられる子どもの姿を求めているのである。

5年生の廃油を利用したキャンドルづくりは、北海道大学の学生ボランティアをゲストティーチャーとして

招いて実施した。「キャンドルづくりを通じて地域との交流を深めたい。」という学生の願いにも沿った活動となった。



キャンドルづくりの様子①

内容 キャンドルづくりを楽しみ 環境問題を考える

5年生の総合的な学習の時間では5～6人のグループでそれぞれがテーマをもって調べ、情報共有をし、クラス内でのポスター発表や討論をする時間を設けている。

その中で、1クラス2時間(全3クラス)を使い、「廃油を利用したキャンドルづくり」を行った。講師は北海道大学の学生ボランティアグループが務めた。廃油は、このプロジェクトが決定してから給食室に依頼をし、一斗缶約14缶分を溜めてもらった。材料は、鍋にたっぷり入れた廃油と油用凝固剤、キャンドルの芯にする紐と、容器となる牛乳パック(給食で出たもの)、そして色付け用のクレヨン。児童5～6人のテーブルにつき1人の学生が付き、ゆっくり説明を受けながら一緒に作業した。

キャンドルが固まるまでの時間を利用し、「家庭から出るごみはどのようなものがあるか」「ごみをできるだけ少なくするためにはどうしたらよいか」などについて、学生がパワーポイントで自主制作した資料を使って説明。



キャンドルづくりの様子②

「焼却時に出る二酸化炭素の量が多くなる」「埋め立て処分が満杯になり、場所がなくなってしまう」といった問題対策に「ご飯を作る時は食べきれないほど作らない」「給食を、できるだけ残さず食べる」といった、子供たちがすぐに実行できる事例が挙げられ、子供

たちは真剣な表情で聞き入っていた。

できあがったキャンドルは、児童がそれぞれ1個ずつ持ち帰り、残りは北海道大学のイベント「キャンドルナイト2010」で役立ててもらった。

効果 体験から学び 行動へとつなげる

楽しんでできる体験は、文章や写真よりも強く印象に残り、環境へ目を向けるよい機会となる。

本校では、体験することで知識が広がり、環境を意識し、環境を大切にすることを心がけることで、行動につなげる環境教育を実践したいと考えている。

言葉での押しつけではなく、なぜ、環境を大切にするのか、体験をとおして伝えることが重要だ。今回、5年生の子供たちは、廃油という「ごみ」になるものが、工夫によって、キャンドルという「使えるもの」に形を変えることを、身をもって体験することで、まさに「実感」を得ることができ、大変有意義な取組となった。



キャンドルづくりの様子③

発展 「気付き」から新たな環境行動へ

昨年度から、学校・家庭それぞれで自分で行うことは何かを考えて調べ、発表や討論をしようという「エコプロジェクト」の学習活動を行っている。

今年度の発表はディベート形式で行い、反論も活発に出されるなど盛り上がりを見せていた。「エコプロジェクト」に取り組む児童の「気付き」から新たな環境行動へとつながることが期待される。

また、夏休みと冬休みに向けて取り組んだ「エコライフレポート」も、環境行動を促すきっかけとなっている。

環境を守る取組は、簡単に結果が目に見える活動ではないが、今後とも積極的に取り組んでいきたいと考えている。



エコプロジェクトの発表

広げよう つなげよう 環境学習の輪



実施校からメッセージ

循環を学ぶ素材として、6年生ならば、歴史の切り口から、物を大切に、徹底的に使いまわす「江戸時代のリサイクル」もおすすめてです。稲わらをわらじに、古くなったほうきは縄やたわしに、馬糞だけでなく灰さえも肥料に変えてしまうリサイクル法は、見事な「循環」のお手本です。